

ブラジル産薬用植物タバブイア・アベラネダエ（タヒボ）から 考えるヒトにおける有用性への展望

徳田 春邦¹、金子 雅文²、山下 光明²、鈴木 信孝¹、飯田 彰³

¹臨床研究開発補完代替医療学講座、医学系研究科、金沢大学

²薬学部、高崎健康福祉大学

³農学部、近畿大学

タバブイア・アベラネダエ（タヒボ）は数百年前よりヒトが様々な病態において使用続けている薬用植物であり、近年はその内部樹皮より有用化合物が単離、構造決定され、詳細な研究が進められている。とくに含有するナフトキノン系化合物である、ベーターラパチョは最近、アメリカ合衆国における臨床試験段階で、がん治療剤としてほぼフェーズ II の終了段階まで進み、その機能も明らかになり、有力なベンチャー企業により医薬品としての応用も視野に入れた展望となっている。一方、演者らも同様な化合物を独自に単離、構造決定し、NFD (NQ801) という化合物名で、がんに関連して数カ国においてその特許も取得するとともに、その素材に他の疾患に対する基礎的な有用性も、他の研究機関も含めて試験を進め、評価できる成果を得た。こうした重要な知見はこの天然物由来素材の、生体内での機能の解析に新しい局面と、大きな進展をみせるものと期待されている。加えて代替医療の観点からも、これまでの永年に亘るヒトでの健康志向に向けた使用経験によりその意義が注目されることから、この一般に市販されている外部因子である“機能性サプリメント”による生体内での疾患制御と、密接に関係している原理に迫りたいと考えている。